

## 1 研究の内容

### (1) 部会テーマと全体テーマとのかかわり

家庭科部では、令和1年度に本校の全体テーマが「学びをあむー新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発ー」となったことに伴い、部会テーマを「生活の探究からあみ直しへ」とした。全体テーマである「学びをあむ」とは、自分の思いを大切に、様々な人・もの・こととかかわりながら自己を更新し、新たなものを創り出していくことを指す。これを受けて部会テーマに示したように、子どもたちには、家庭科の学習を通して自分自身の生活を見つめ直し、学習したことを生かして主体的に行動し、自分なりのめあてに向かって柔軟に修正を繰り返しながら、新たなよりよい生活を創造していける力を育みたい。

このとき、解決の方法を多様にし、主体的に生活を創造していくためには、子どもたちができることを増やしておくことが重要であると考えている。そのため、裁縫や調理の実習では、子どもたち一人ひとりが確実に技を身につけることを大切にしながら、授業実践に取り組んできている。

### (2) 昨年度の課題と今年度の研究の重点

昨年度の研究から得られた課題は、学習の中で持続可能な社会の実現へのまなざしをいかに育んでいくか、家庭科2年間の学習内容をあみ直してみることで、家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキルについての考察を進めることであった。家庭科の学習を通して持続可能な社会の実現へのまなざしを育んでいくことは、大きく変化する社会と主体的に向き合い、よりよく生きるために、思考し、行動する市民性を育むというてつがく創造活動の目標に繋がっている。また、本校の研究開発課題は、新教科「てつがく創造活動」を中核に据え、メタ認知スキルや社会情意的スキルを育成する教育課程の開発である。各教科での取り組みの成果を示すことが求められている。

これらのことから今年度、重点的に取り組んだことは次に示す二点である。一点目は、授業実践を通して家庭科のカリキュラム全体を持続可能な社会の実現へのまなざしをいかに育んでいくかという視点で見直していくこと、二点目は、異学年との交流を意識させながら、相手意識を持った学習を継続的に設定することにより、子どもたちにメタ認知スキル・社会情意的スキルを育む授業実践の試みである。

#### ①持続可能な社会の実現に向けて子どもたちにいかに問うかをあみ直す

昨年度までの研究から、持続可能な社会の実現への意識やその価値判断のもととなる感性を育むにはトピック的にSDGsを取り上げるだけではなく、年間を通してくり返し意識づけを行いながらカリキュラムを構成していくことが有効であることが明らかになった。表1は、今年度授業実践で子どもたちに投げかけた問いをまとめたものである。

表1 主な問いの例

学年	題材	問い
5年	家庭の仕事にはどのようなものがあるだろう (ガイダンス)	・家庭の仕事をするとき、家の人はどんなことを気にしている？ ・家庭の仕事の中で地球環境に関わる仕事はどのようなものがある？
	お茶かおるさんのお悩みを解決しよう (整理整頓)	・整理整頓にはどんな効果がある？ (図1)
	フードドライブの試みに参加しよう	・家にある食品をリサーチして寄付できるものがあるか、家の人と話をしてみよう ・地球のために今、自分たちにできることは何だろう？
	買い物名人になろう	・ものを買う時、どんなことを気にする？ ・チョコレートを買う時、どんなことを気にする？ (附属高校生との交流授業)
6年	ぞうきんを作ろう (ミシンの学習)	・使い古しのタオルで作るぞうきんのよさは何だろう？
	SDGs 新聞の発表	・企業や自治体等では今どんな取り組みをしているだろう？

フードドライブの試みに参加しよう	・家の人や5年生に活動の意義を伝えるには、どんな情報が必要だろうか？
SDGs クイズを作ろう	・これまで学んできたことの中で自分が大切だと思うことや、1年生に知ってほしいことは何だろうか？

ここに示した問いは一例であり、家庭科のどの学習内容にも持続可能な社会の実現に関わる内容が存在する。それは、生活を学ぶ教科である家庭科だからこそその必然であり、同時に社会の変化を捉えて学習を変化させていく必要があることを示している。

筆者が授業実践を通して問いを追究しているのは、問うことで子どもたちの思考が焦点化されると共に、実習等が単なる活動に終わることなく探究的な学びになるからである。問いを追究し続けることは授業のあみ直しの連続であり、教師自身のメタ認知スキルに大きく関わっていると考えられる。



図1 整理整頓の学習を生かして教室の環境を見直す5年生

## ②家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキル（期待する子どもの姿）

家庭科で育みたい、主体的な学びを支えるメタ認知スキル、社会情意的スキルを表2にまとめた。

表2 主体的な学びを支える力（メタ認知スキル、社会情意的スキルへの着目）

	メタ認知スキル	社会情意的スキル
個による 学びの場面 ↑↓ 協働的な 学びの場面	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">自分や自分の生活を改めて見つめ直し、課題を見出すことができる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">学習したことをどのように生活に生かすか考え、実行することができる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">相手の反応を予想しながら活動することができる(A)</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">粘り強くかかわり最後まで取り組むことができる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">没頭できる・楽しめる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">みんなのために今、自分ができることを考えて、実行できる</div>
	友だちとの違いを受けとめ、よりよさを追究し、自分なりに工夫することができる	



図2 1年生にぞうきんの織り方を教える6年生

家庭科部のテーマにある生活の探究は、自分の生活を立ち止まって省察することから始まる。そして家庭科の学習を生活に生かす上では、身につけた技や、学習を通して気にするようになったことは何かを意識化して行動することが必要である。授業では自分にとっての当たり前を友達と交流することで、“よさ”が固定化されることなく“よりよさ”の探究、生活のあみ直しへとつながっていく。このように学びを生活に生かす家庭科の学習過程そのものにおいて、メタ認知スキルは育まれると考える。また、実習の場面において、粘り強さ、没頭すること、協力する態度等が育つ。

では、粘り強さ、没頭すること、協力する態度等が育つ。

先述したように今年度は継続的に異学年とのかかわりを意識した学習に取り組み、その結果、昨年度作成した表に項目（表中A）を追加した。2（2）に記すように、1年生とのかかわりを意識した学習を設定することで、相手（たてわり班でペアを組んでいる1年生）の反応を予想しながら製作をしたり、相手にわかるように説明しようとして工夫したりする姿が見られたからである。（図2）

## 2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

（1）持続可能なまなざしを育む授業実践～5年生「地球のために今自分達ができること」

### ①題材のねらいと概要

授業者は、コロナ禍以降SDGsを題材として取り上げてきており、子どもたちが広く地球の現状や課題について知り、今自分たちにできることを考え、小さなことでも実行してみる経験には意味があることを実感していた。一方で、こうした課題がどこか遠い世界のことのような認識にとどまり、自分たちの生活とのつながりが見えないままになっていたとの反省があった。授業ではこれまで主に調べ学習や

発表という形で実践してきたが、学習後に自分で募金ができる団体を探したり子ども会議に参加したりする行動に発展する姿があったことから、授業として活動に参加する経験が有効なのではないか、との思いを持っていた。

今年度お茶の水女子大学で発足したSDGs推進研究所が、セブン&アイホールディングスと連携して「フードドライブ<sup>1</sup>」の試みを行うことになった。そこでこの取り組みに、5年生、6年生が共に参加したいと考えた。小学生が実際に食品を寄付するには、保護者の同意を得る必要がある。本授業ではまず、6年生の子どもたちが昨年度の食品ロスの学習を生かして保護者と5年生の子どもたちに向けて呼びかけの手書きのポスターを作成した。5年生はこのポスターを介して保護者にフードドライブの取り組みを伝えることとした。ここでは、5年生の学習を取り上げる。

## ②題材名「地球のために今自分たちができることは何だろう？ーフードドライブに参加しようー」

### ③学習指導計画（授業として全4時間 実際のフードドライブの活動は朝の時間に設定した）

- |     |   |
|-----|---|
| 第一次 | 6年生が作成したポスターからフードドライブの概要を知り、自分たちも社会の課題解決のために行動してみようとする意欲を持つとともに、フードドライブへの参加について家の人と話をしてくれることを課題とし、学級で共有する。(2時間・・・2/2時間目 動画授業) |
| 第二次 | 5年生が寄付した食品の実際について調査をして気づいたことを話し合う。(1時間)   |
| 第三次 | 地球のために今自分たちができることは何か、アイデアを出し合う。(1時間)  |

### ④活動を通して自分たちの生活を見つめ直す

題材の冒頭で子どもたちに、家にある食品を調べて寄付できる食品があるか家の人と話をしよう投げかけた。そして次の時間（第一次2時間目）に学級で話し合い、その内容等を共有した。活動をきっかけとして家の食品を確認してみてもわかったことがいろいろ出された中、フードドライブに寄付する際「賞味期限が1ヶ月以上先の食品」という注意事項があったため、家の食品の賞味期限を確認したという話題になった。以下はその一部である。

- |    |  |
|----|--|
| A児 | 非常食の入っている箱を見たら賞味期限が切れてた。非常食でも時間がたったら食べなきゃいけないね、って話した。  |
| B児 | カップラーメンを箱買いしてて、これいいじゃんって思っていたんだけどよく見たら賞味期限が切れてて。食べてなかったんだな。だめだなって思った。  |
| C児 | 賞味期限は（切れても）食べられるって言うってたんだけど、学童でおやつ食べてた時には、賞味期限が切れても捨ててたから家で食べる時にはいいんだけど、そういう命を預かっているところでは、食べられないんじゃないかって思って。 |

C児は自身の経験を重ねて、自分の家で食べるのであれば賞味期限にこだわりすぎることなく自分の判断で食べるかどうかを決めてもよいと述べている。しかし、食べ物の安全性は命にかかわる一大事であることから、学童では賞味期限が切れたら食べないという選択をしていた。自分や家族以外の人々がそれらの食べ物を食べるとなれば、相手に対する安全性を確保するために賞味期限の確認は必要である。今回はフードドライブに出す食品であったため、賞味期限を制約する意味が再確認された。

第二次では実際に寄付された食品の調査を行なった。（図3）この時、どのような方の元に届けばこれらの食品が有効活用できるのか、また、どうしたら寄付先の方に無事に届けることができるかを考えながら作業をしていた子どもの姿が見られた。SDGsの目標12にあるように自分で購入したものには、使う責任が生じる。家にある食品は、家族が食べるものという無意識の認識があるが、フードドライブの活動を通して物を有効に循環させるという選択肢を新たに獲得したと言える。



図3 実際に集まった食品の品名と量、賞味期限の確認、集計を行う5年生

## （2）異学年との交流からメタ認知能力、社会情意的スキルを育む授業実践

### ～6年生「どうしたら1年生の安全基地になれるか」

#### ①概要とねらい



本校では入学当初からたてわり班が編成され、6年生はその中の小グループ（5～6名）のリーダーとなる。その小グループの中の1年生とはペアを組み、運動会やじゃがいも掘り等の行事や、児童会活動としてのたてわり活動でともに活動する。

家庭科では、こうした機会をとらえて活動ごとに気づきを促しプリントに蓄積していく「1年生リサーチ」を実施して1年生への理解を深めていくと同時に、どうしたら1年生の安全基地になれるか、という問いを投げかけ、問いに対する答えを探っていくことにした。これに伴い、ミシンの学習を生かしてぞうきんやきんちゃく袋をペアの1年生のために作る等の学習活動を行った。

## ②学習指導計画（授業として全11時間 このほか活動ごとに1年生リサーチを継続している）

第一次 5～6月 授業として3時間 朝の時間0.5時間

- ・ミシンの使い方を学習した後、たてわり班のペアの1年生にぞうきんを作る。（3時間）
- ・ぞうきんをプレゼントし、一緒にぞうきんをしばってみる。（朝の時間0.5時間）

第二次 11～12月 授業として4時間

- ・袋の製作の実習後、余りの布を活用して、ペアの1年生に給食のテーブルクロスを入れる袋を作る。（4時間）

第三次 12月（家庭学習）・3月 授業として3時間 学年活動として0.5時間

- ・（家庭学習）1年生に出題するSDGsクイズの概要を考える。
- ・スライドまたは紙芝居方式でSDGsクイズを作る。（2時間）
- ・作ったクイズを互いに見合い、推敲する。（1時間）
- ・1年生にクイズを出題する。（学年活動0.5時間）

第四次 3月 授業として1時間

- ・どうしたら1年生の安全基地になれるかという問いに対する答えを話し合う。（1時間）

## ③使う相手を想像しながら作る



図4 1年生の手のひらサイズに合わせ作ったぞうきん

ミシンの学習で自分たちが学校で使用するぞうきんを作っていた時の、一人の6年生のつぶやきがこの実践のきっかけである。その子どもは、自分たちが1年生の時に6年生から手縫いのぞうきんをプレゼントされたことを覚えていたと言う。

ペアの子が使いやすいように手のひらサイズを調査したり（図4）、気に入ってもらえるように好きなものをインタビューしてぬいとりをしたりと、相手の反応を予想して喜んで受け取ってもらえるように気遣う姿や、相手にプレゼントするという意識を持つことで責任感を持って取り組む姿が見られた。また1年生に渡す場面を想像して真剣に取り組むことで自身の理解が確かになっていく効果は大きかった。

## 3 今後に向けて

今年度は家庭科の学習内容を持続可能な社会を実現するという視点からあみ直すことと、異学年とのかかわりを意識して学習に取り組むことを重点課題とした。実践する中で実感したことは、継続して働きかける積み重ねの大切さと、社会の変化に対応して教師が持っている既存の家庭科観をあみ直していく必要性である。

筆者は家庭科という教科を「裁縫や調理等の実習をやる経験を通して、人やものとのかかわり方を学ぶ教科である」と捉えた。新たな視点をあみ合わせていこうとする時、同時にこれまで家庭科が大切にしてきた学習内容の重要性が改めて浮き彫りになったことは再発見であった。今後も子どもたちが生きていく社会を見据えて生活を創り出す基本的な力を身につけさせるとともに、社会的な課題を自分の生活とつなげて捉えさせ、主体的に解決できる態度を育むことを大切にしていきたい。（岡部）

<sup>1</sup> フードドライブとは、各家庭で使い切れない未使用食品を持ち寄り、それらをまとめてフードバンク団体や地域の福祉施設・団体等に寄贈する活動のことである。